

『ホスピスへの扉』

『先々週末、札幌で全国ホスピス・緩和ケア病棟連絡協議会が開かれ、私も5名のスタッフとともに出席した。全国からホスピス・緩和ケア病棟で仕事をしている、またはこれから始めようと準備中の600名ほどの人たちが一同に会し、活発な意見交換が成された。

来年は福岡で開かれる予定で、主催は栄光病院である。3年間、私が学びを得た栄光病院。思えば、そこに勤務することになったのも、私の得意の(?)直感と思ひ込みの強さからであった。協議会を終えて函館に戻る列車の中で、急にあの頃のことを思い出された。

1997年春。その頃の私は大学の医局の中でそこそこ責任のある立場となっていた。血液疾患を持つ患者の治療方針を決定したり、骨髄移植の責任者であったり、厚生省のがん研究会の斑会議に出席するべく東京や名古屋への出張も多くと、何かと忙しい日々を送っていた。一方で、自分自身、なかなかじっくりと患者と向き合う時間を持ってないことで、何となく空虚な気持ちになることが多くなっていた。ホスピスをいずれやろうと心に秘めていながら、いつまでもそれが現実的なものとならないことに少しあせりを感じていたのかもしれない。

ある時、全国のホスピス施設のリストが載っていた本を手にし、自分にふさわしい病院がないか、と漠然と眺めていた。今さら、東京や大阪のような中央に出て行く勇気は無かったが、リストの中にふと、目に留まった病院があった。それが、福岡にある亀山栄光病院(現・栄光病院)であった。ちょ

うど5年前に北九州の小倉に半年間研修に行ったこともあり、その時に九州はとても気に入っていた。気候や地元の人たちのさばさばとした気質も自分にとても合っていると感じていた。何故か気になっていた。

そんな時、たまたま従姉妹の結婚式に呼ばれ、福岡の地を踏んだ。ちょうどいい機会だし、病院を見学してみようか…、と思いましたが、時間の調整がつかず、この時は叶わなかった。ただ、久しぶりに会った旧友にはどんな病院かをしきりに尋ねていた。

金沢に戻り、いつしかそのことを忘れかけていたが、6月のある当直の晩、医局のパソコンで、インターネットを接続し、何気に「ホスピス」と入力し、検索した際、いくつかのサイトが紹介され、その中に亀山栄光病院という名前をまた目にすることになる。さっそく、ホームページを見たところ、どんどんとその世界に引き込まれていった。

特にホスピス長の下稲葉先生が書かれた患者さんとの関わりの記録には、大きな感動を覚えた。興奮していた。“自分が求めていたホスピス…、それをこんなに本格的に実践している病院がある。しかも、あの病院ではないか”さらに「医師募集」という文字が目に入り、覗いてみると、なんと内科医を募集している。単純で、思ひ込みの強い私は、春から何となく気になっていたこの病院にインターネット上で出会うことで、何か運命的なものを感じていた。それは、私の直



感であった。その日の当直の夜は感動と興奮の中、あまり眠れなかった。

行動力には自信のある、せっかちな私は、翌朝さっそく病院に電話を入れ、1週間後には福岡へ飛んでいた。あまりにも突然の話に、妻は啞然としていたが、私のホスピスへの思いをよく理解してくれていただけに、快く送り出してくれた。というより、“この人は言い出したら、もう聞かない”とでも思っていたことだろう。

福岡空港から車でわずか5分あまりのところ、亀山栄光病院があった。その日、理事長、院長、副院長（ホスピス長）にお会いし、私はホスピスへの思いを一気に語った。今まで、大学では誰にも話したことのない秘めた思いであった。温かい眼差しでじっくりと私の話を聞いてくださった3人の先生は、その思いをがっしりと受け止めてくれた。その後、下稲葉先生にはホスピス病棟を案内していただいたのだが、もう心の中では、大学を辞めて、この病院に来ようと決めていた。ホスピスに関わりを持つ初めての大きなチャンスであったし、それまで大学で力を注いでいた骨髄移植もようやく軌道に乗り、後輩に任せていけると確信していた。

確かに、思い込みの強い私ではある。しかし、この時、私の新たな運命の扉が開かれたことは間違いない。諸業務の引継ぎを終え、8ヶ月後、大学を辞め、18年間慣れ親しんだ金沢の地を家族とともに離れた。希望と夢を持って…

今、インターネットで「ホスピス」と入力して検索すると、その中に、この私たちの病院のホームページが紹介されている。あれから6年が経過していた。

